

はじめに

近年、外因性内分泌攪乱化学物質による環境汚染問題が大きくクローズアップされています。

人や野生動物の内分泌作用を攪乱し、生殖機能阻害、悪性腫瘍等を引き起こす可能性のある外因性内分泌攪乱化学物質は、科学的には未解明な点が多く残されているものの、それが生物生存の基本的条件に係るものであり、世代を越えた深刻な影響をもたらすおそれがあることから環境保全上の重要課題の一つであると思います。

これまで、化学物質の毒性や発ガン性などについては比較的詳しく研究されてきましたが、今後は、物質のホルモン様の作用という新たな観点での研究が急務であり、すでに、環境先進国の欧米やOECD（世界経済協力機構）では、化学物質のホルモン作用を調べるための試験システムの研究が始まっています。

日本においても環境庁が打ち出した「環境ホルモン戦略計画'98」を中心に調査研究が始まったところですが、10万種あるともいわれている身近な化学物質の調査にかかる時間等を考えると、バイオアッセイ法などを利用することも考える必要があると思います。

いずれにしても、私たちをとりまく環境は多くの化学物質に取り囲まれているので、ホルモン攪乱作用のメカニズムと同時にその作用の強さをできるだけ明らかにする努力を重ねつつ、環境リスク評価を進めることが重要な課題です。

このような中で、私ども研究所職員一同といたしましても、環境行政の科学的・技術的中核として、これまでもまして、多種多様化する市民ニーズに応え、複雑化する社会変革に対応するため、一層の科学的知識と技術の研鑽に努め、化学物質を初めとする身近な環境問題から地球規模にわたる環境問題までの幅広い調査研究に取り組み、よりよい環境を育んでまいりたいと考えております。

本年報は、1997年度の業務と調査研究をとりまとめたものです。ご高覧のうえご意見ご批判をいただければ幸いに存じます。

1999年3月

川崎市公害研究所
所長 佐藤 静雄